
バカ 子ちゃん

最近 3DSに興味がある人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカ 子ちゃん

【Nコード】

N1042Q

【作者名】

最近3DSに興味がある人

【あらすじ】

センター試験が迫ったある日のこと、貧乏学生である矢面タツヤくんは非常に苛立っていた。なぜなら隣には幼馴染の、可愛い女の子がいたのだ。その子は頭が悪いし、素直でもないし、性格もひん曲がっている。でも顔だけは良い。ついでにスタイルもよらしい。そして、その子は上半身裸で言いよってくる始末。つまり勉強ができないのだった……。タツヤくんは勉強ができるのかだろうか？

(前書き)

ふと思い立ったら、女子高生はブランドものだということでした。
オッサンにとってはそういうものです。

ちなみに僕はまだ、オッサンじゃないです。

高校三年生の男の子、やおもて矢面タツヤ、一流の学校を目指して頑張る貧乏な受験生だ。彼は死に物狂いでエリートを目指す野心家だ。

病弱な母しかいない家庭環境……と言う不遇な設定が付いている彼に失敗は許されないのだ。

そんなタツヤには幼馴染がいた。顔は良くて、性格は悪くもなく良くもない。そんな女の子だ。そんな女の子は馬鹿だった。いわゆるお嬢様と言うヤツだ。タツヤと違って仕方がないくらいの金持ちだ。

「ねえ、ワタシのこと嫌いでしょ」

栗色の髪の毛にリボンでツインテールを決め込んだツンデレ娘、びし菱橋チマツが言った。彼女は美人さんだ。目はくりっとしていて宝石みたいだ。唇は美味しそうなくらい、潤っていた。だが、変態的な思考回路だった。

撫でまわすように、手をタツヤの胸元に這わせている。コイツはとんでもない痴女だ。頭がよくない様子。しかしスタイルは良い。タツヤは勉強に集中できない。冬なのに、隣で誘っている女がいるのだから仕方がない。

「ワタシのこと嫌い？」

しつこいな、と思いタツヤは叫んだ。バカは死ねばいい、タツヤの信条だ。

「ああ、大つきらいだから早く死んでくれ！あとさつきから俺さまの股間をちらちら見るな！」

「キヤツ変態！ ホントにタツヤだわ！」

「それはお前だ！ 変態女！」

タツヤはシャーペンシルの尖った所でチマツの太ももを突き刺した。血は出ないが、悲鳴は出た。

「ぐはあ！ 痛い！ 痛いわ、バカ！」

「おまえこそ、今世紀最高のバカだ！」

「バカって言った方がバカだわ！！」

「なんだと！！」

「なんだわ！！」

「……な、なんだわ？」

タツヤはチマツの事をバカだと思った。

チマツが勉強を教えろとせがむから、タツヤは仕方なく彼女をお家に招いたが失敗だった。バカに何を言っても聞きやしない。それどころがチマツはタツヤの邪魔をする。おもに性欲に訴えた直球攻撃だ。上半身裸だから始末に悪い。

「とりあえず服を着ろ！ 勉強に集中が出来ん」

「暑いのよ！」

「今は冬だ！ センターが近いんだよ！ 邪魔すんな！ バカ！」

「冬でも大丈夫だもん！」

「なるほどな、バカは風邪をひかないと言うからなあ……」

「ええ、そうね！」

チマツは開き直ってスカートを脱いだ。コイツは本格的なバカだ。後間が腐っているとしか思えない。何を勉強させようと言うのか。タツヤはもう怒りが込み上げる。有頂天になりそうだったが、何とか怒髪天にとどめた。

「お前は何なんだ？ なぜ俺の邪魔をする！ 俺は一流のエリートサラリーマンになるといふ類まれな夢があるんだ」

「ワタシの夢はタツヤのお嫁さんよ！」

「なんだと！」

「なんだわ！」

「……やめる。バカが移る……」

タツヤは顔を手で覆った。そして思考した。「なるほど、お嫁さんと来たか……だがそれがどうした。俺はバカが嫌いだ」タツヤはチマツの事がいけ好かない。

「なるほど……俺にエリートになられたら、バカであるお前は俺と一緒にいられなくなるな……」

「そういう事よ。私はアナタが大好きだから、あの手この手で勉強の邪魔をするわけ。人間の三大欲求は食欲、性欲、睡眠欲！ 決して知識欲ではないんだわ！」

「あんな、俺はお前と結婚はしないぞ？」

「え？ ひどい……！」

「酷くはない。なぜなら俺はそもそもお前とは付き合ってすらいないのだから……！」

「そ、そうだった……！」

チマツは十八年間の人生でようやくタツヤとはただの幼馴染である事に気が付いた。それはそうだ、タツヤは、聞きしに勝るガリ勉強野郎だ。女と楽しむつもりは毛頭なかったのだ。

なのでタツヤは馬鹿馬鹿しくなった。目の前で半裸の女がめそめそ泣いている。本当に馬鹿らしい。今は冬だぞ！ と再三いつけカイクを投げつけた。

「ほらな。バカだ」

「うっ……。私、タツヤと離れたくないよお」

「うぜえ！ 死ね！ 俺の事が好きなら俺の邪魔をするな！ お前は俺の隣にいちゃいけないんだ！ 馬鹿なお前でもそれくらい分かれ！」

チマツは本格的に泣いてしまった。確かにチマツは馬鹿者で、愚か故に服を脱いでガチガチ震えるほどの大馬鹿だ。カイクを胸の谷間に挟んで使う変な奴だ。タツヤは、こたつ布団をぐしゃぐしゃにされてイライラした。ペンがよく折れる。

しかしタツヤとしても、チマツが勉強を教えろとせがんだ時は内心、心底うれしかった。しかしそれが勉強を邪魔するための口実だ

と知って、死ねと思った。チマツが女でなかったら、鼻の穴からコーラを流して泣かしてやるところだった。

タツヤは溜め息を吐いた。チマツはコーラなしで泣いているのが、今の現状だった。

「ふぐう……。ワタシ、バカだからこうするしかなかったんだよ……。これでも馬鹿なりに頭使ったんだよ……。」

「やれやれだな。頭を使って色仕掛けか……。それでは俺の下半身にしか訴えかけることはできないぞ？ お前は本当に馬鹿だ！」

「ううう……。またバカって言ったあ。私は天才的な馬鹿なの……。」

チマツはティッシュを取り出していよいよ本気で泣きだす準備に入った。タツヤは方程式を解きながら、ティッシュを取り上げた。

「ああ！ ティッシュが！」

チマツは鼻水を垂らした。タツヤはティッシュ箱でチマツの頭を叩いた。もちろん角の立っているところで効率よくダメージを与える。

もう、タツヤは勘弁してほしいかった。十八年間、勉強だけをしてきたのだ。何者にも目をくれずに頑張ってきた、それこそ幼馴染さえにもだ。そんな努力と覚悟をちやちな性欲で邪魔されたらかなわない。

「なあ、何で俺がこれほどまでに勉強を頑張ると思う？」

タツヤはもういい加減にしたい。

「さあ、バカな私には分からないよ？ 勉強なんて、自分にとっては変態のたしなみだもの」

「俺はな、エリートになつて最高の人生を送りたいんだ。何も不安なく……何不自由なく生きていきたいんだ」

「タツヤは貧乏だもんね。超が付くくらいの……。私は超が付くくらいお金持ちだけどね！」

タツヤはイラついた。バカだから気づかいは出来ないようだ。

「ああ、そつだよ！ 俺は貧乏だったから！ エリートになりたい

んだ！好きな女を不自由させないだけの！」

「へえ、そうだったんだ」

「おまえ！バカだろ！いい加減に気付け！」

「え？私は馬鹿だって自覚のある馬鹿だよ！それくらいの自意識はある！馬鹿にしないでよ！」

「違うバカ！俺だってな！お前が好きなんだよ！」

タツヤはティッシュ箱がへこむ勢いでチマツを叩きまくった。恥ずかしさのあまり角っこで叩くことさえ忘れてしまう。チマツは器用にティッシュを抜き取り、涙と鼻水を拭った。

しかしタツヤの告白はにわかには信じられない。タツヤは勉強しできないのだ。ある意味で変態と言えるほどのだ。

「マジで？だってタツヤは数学で興奮するニュータイプなのに！」

「そうだよ！でも俺も普通に女の子が好きになる！時には数学よりも魅力的に映る！それがお前だ！」

「なるほどね！」

チマツは手をパンと叩いた。そして服を着始めた。

「うわああん！嬉しいよ！」

「なぜ！今、服を着始める？いくらでもタイミングはあっただろう？バカなのか？バカなのか？！」

「だって自分の事を好きな男の前で裸だと思ったらそれは素晴らしいし恥ずかしいことだと認識したんだよ……」

「なるほど……馬鹿だ」

「えへ！でもこれで、結婚しよう！」

「お前、バカだろう？俺の話が全然頭に入っていないな！そしてお前も勉強しろ！何のための勉強会だ！お前は裸になりに来たのか！保健体育はセンターにはないぞ！」

「え？勉強？！マジですか？」

「大マジだ！俺だってお前と離れ離れになるのはあんまり嬉しくない！だったら一緒に勉強してバカみたいに賢くなれ！」

「なるほど！それいいかも！」

「じゃあ、やるぞ！ 掛け算は出来るか？ つか出来るよな？」

「さすがの私もそこまでバカじゃない！ バカにしないでよ！ 七

掛け七は五十一だ！」

「バカ……」

タツヤのペンは良く折れた。

(後書き)

ちなみに僕の中では、バカは何となく、可愛げがあります。
でもアホは何となく巢食い様がない気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1042q/>

バカ 子ちゃん

2011年1月13日18時10分発行